思國歌也、

〔冠辭考五〕たゝみごも　へぐりの山　むらぢがいそ

古事記に、多々美許母、弊具理能夜麻能云々、こは疊にせん料の薦を編を隔つといひて、への一ことにつゞけたる也、

〔古事記傳二十八〕多々美許母は疊菰にて、次の幣に係れる枕詞なり、然連くる由は、疊みたる菰重と云るなり、重は、二重三重八重などの重なり、疊むとは重ぬることにて、菰を疊ねて幾重もある意に重と云り、又疊をば既に疊と云物にしたる名として、疊の菰とも見べし、菰などを疊み重ねて造れる物を、疊と云なり、其も幣どつゞく意は、上に同じ、〔冠辭考〕に、疊にせむ料の菰を編を隔と云とあるは、いさゝか違へり、幣陀都と云は、重を立と云ことなれば、本は重と同じけれども、其に二ッの意あり、一ッには重をなして疊ぬる意、二ッには物と物との間を塞絶つ意にて、隔ノ字は此ノ意に當たる字なり、然れども此も本は重を立るより出たる意なり、されば菰を編隔つとあるも、重をなす意に取れば違はざれども、其意には非ずて、隔ノ字の意に云れたりと聞ゆるをや、

〔日本書紀十三允恭〕二十四年六月、御繕羹汁、凝以作氷、天皇異之、卜其所由、卜者曰、有內亂、〔略〕中則流輕大娘皇女於伊豫、是時太子〔輕太子〕木梨歌之曰、於褒企彌烏志摩珥波夫利、布儺阿摩利、異餓幣利去牟鋤、和餓哆哆瀰由璹、去等烏許曾哆哆瀰等異紲梅、和餓兎摩烏由梅、

〔萬葉集十一〕寄物陳思歌

疊薦隔編數通者道之柴草、不生有申尾、

〔萬葉集十二〕寄物陳思歌

相因之出來左右者、疊薦重編數、夢西將見、

木綿疊、田上山之、狹名葛、在去之毛、不令有十方、

〔萬葉集十六〕乞食者詠二首

伊刀古、名兄乃君、居々而、物爾伊行跡波、韓國乃、虎云神乎、生取爾、八頭取持來、其皮乎、多々彌爾刺、八